新編水滸畫傳

八編

貳

へ21
875
72

遠へ
門
875
72

神書佛書醫書國學
繪本 手本 新古賣買
手遊いろく淨瑠璃
御注文アリタシ

横堀町三休橋西入
河内屋孫五衛

新編水滸画傳卷之七拾二

東武 高井蘭山翁譯編

明治三年十月十日講求

○五臺山ハ宋江參禪ス

東京大相國寺ハ菜園と申す所へ放く立て花和尚魯智深曾て
ゲテモノ勇猛と威ぶ名聲〳〵ある者只宋江孫子ハ入く山林と奪ひ強盜の
所行をなす〳〵渭州ハ入く宋江ハ入く山林ハ遂の世の軍平ぶ〳〵ハ
偽く〳〵家和の所ハ五臺山の智眞長老と訪んと欲ひ長老ハ菊世年人ハ
知識まそ過去未來のことを曉〳〵ものゝ人四名數年以來より魯智深も
乃ち引分逃命の者〳〵ることを知りのひ〳〵ものも魯智深まゝ俗緣を
ぶ〳〵と殺生の債と逃さんと欲するハ固て世〳〵魯智深と作〳〵て塵世
の間ハ苦を おさ〳〵ものひ〳〵苦哉智深ハ宿根ハ牧乃人あるの名今日

仏魔訳と記して再び和尚と称せんと欲とる。宋公明も又素より
居人みな知識と成ふ智深長老と称せんと欲し。法の訳訳と一
ふ線人と成し。遂ふ多屋山を屋で飛々行ふ。やつの辺ふ多り
しば。法僧仏高僧と呼ん。宋江魯智深おと近へる。僧侶の間ふ魯
智深と渾徹る丟多りける。今日くれぐ。百姓人の家像と世ふ居く
しく。精米して糸結しる。法の僧侶一日ふ減じる。又一人の
僧侶生く宋江ふ対面し。長老い今坐禅入定の時節なるぞ。自し
招軍と迎へ。先知客寮ふ入し。歇まへて宋江おと知客寮ふ近て暫
くして後侍者出く云ふ。長老已ふ方丈ふ出く。招軍と待ふ。遂
ふ来りの人と僧訳を引く方丈ふ入れば智深長老自し階の
下ふ降りて宋江おと堂上ふ近へる。宋江彼長老と礼ふ

六十有餘の人。眉長く類白。儀表堂々として奇美の相あり。宋江ふ百姓
人の第一ふ香を挑し。長老と三拝せり。魯智深ハ感悦の涙。却て袂
眼ふ涙を含。香を焚花を捧し。長老と拝し。長老礼ふ答て云
汝は山と去てとや。数年と過せり。人と教し。夫と放つ。招軍昔ふ
いしぐるや。魯智深こと呼し。呂訳と仏し。黙止しる。宋江ふ云来る
本長老の清徳い聞し。縁ふ属人して。弟子訳と教せざりき。今招ぜ来る
つく遠の恵と征伐ぐ。ふ仏処ふ到り。奇人今堂訳大和尚の法教
と拝し。自し座ふ揖ふ。智深和尚ハ。数年来し。一初よ
主く。へと教しぬと。人ふ。京善人のあるべ良吉の事と害ぜ。宜
しく乃と訳ひ。和のとあるべ。智深長老の云仏方の容像ふ
南山ふ到り招軍おの天ふ登て乃と。呼嘘ひ仏方ふ我老ふ

ゝり百八人の英雄い各ゝ義氣を知まり我等子魯智深今家ゐ
宮ふ住て共ふ我と戯ることゝ入ゝ仏ふ食り我豈是と恢ぐゝんや。
宋江此云と笑て深く感謝せり。魯智深一色の金銀宋紙を長老ふ献ぜ
長老問ゝ云。汝此ふの物ハ何の処よりぬるゝやゝ不義の財ゝて為あゝべ。
我変ゝ是と結ぶ。魯智深云我教授貴ふ受り暮る恩と是と
不拒して受わゝ此ふ我所ふ献じ左ふ我所ふ献じ長老の云ゝ
我此財物と分ゝ一義の縁と思へ汝ゝ此と減じてゝ苦果と遂しゝ
人魯智深是と聞ゝ長老とハ謝せり。宋江も又金銀宋紙と堂頭
和尚ふ献ぜ。智深長老堅ゝ辞して是と結ゝ宋江合掌
て云和尚ゝ礼物と受ゝ是と結庫所の弟ふ送り老寺の僧
所ふ弁の供養すべしと。此魯智深と後して彼礼物と結庫ゝ方ゝ

送りぬる。此日長老方丈ふ於ゝ百餘人の沢紙と答礼しゝ。宋江
晩ふ及りしゝ宋江ふ於ゝ客殿ふ一宿せり。翌日結庫弁と設け後と
つきぬれば。智深長老法堂ふ出ゝ山の僧所と暫ゝ山の僧
所ゝ法堂の内ふ入ゝ宋江魯智深等ふ出の沢紙を
くゝ辺ふ立并び時長老法座ふ登ゝ焼香あり。此法座と備へ
ゝひしゝ法の僧所一同ふ合掌せり。宋江座の下ふ居ゝ長老礼
拝して云。某一句の法と豊沢大和尚ふ問んと欲ゝ彼ゝ宮所是と教
へゝ人長老のいゝゝ汝軍ゝ上て問ゝ。
宋江又礼拝して問ゝ。浮世の苦海を渡ゝ人如何至微生
死最大ゝ大和尚ゝ示しゝ人長老此偈と説て言て云
六根束縛多年。四大辜纏已久。堪嘆石火光中。翻了幾

宋江智真長老渤海に語る

箇筋斗嘆閻浮世界諸衆生泥沙堆裡頻嘆吼

长老偈を説早りのひしうば宋江又法名と共ふ者と指く礼拜し。
手ホ百八人孔くぶ公日生尊死して世〜れ逸人と指ことぞ云ふ。长
老已ホ法座とかつく雲堂の内ふ入のひ法人皆奇年りしぶ长老又
宋江魯智深ホと方丈ふ徐ひのひ宋侯負ふ入く日已ホ暮ふけ宋
江又問て云系りと魯智深と共ふ江ふ日尚ホ逼岡て深更の清数
と吟んと欲へども。ひ節ハ勅命と共つく。大軍と外ヒとなれば久しく
留りぶ已系より大和尚ハ迎去来朱のことと嘆しのみ。吾智識なり孔ぶ
系ふ法人ぶ初任の吉凶禍福と知りもの人智ホ长老こと呼ぶひて。
又四句の偈と書ホ偈ホ云
當風雅歌飜東関不團圓隻眼功労足雙林福寿全

长老ホ偈と宋江ホ点て云ふ孔ち孔軍一生の事こ久〜て後必ず
疑ふぶ〜。宋江ホ偈とえれなぶ云と嘆こぶ长老ホ對して云系
長ほて法名と指ぶ孔ぶ长老明〜ふ解して。前後の吉凶と知し
ぬ人长老の云ふ孔保機の法名ふ孔ぶ孔軍自ら奏じ人孔ふこと
分明ホ云ぶ孔ふ天機と泄さんとて深く先と秘〜ぬホ长老又魯智
深と呼ぶ〜系〜ハ法今ホと去ぶ孔ホ列ことなるぶ法ガ正果淵
ふ〜。孔又四句の偈と法ホ投んホ法名ふ孔ぶ
列偈と説ぬ

逢夏而擒遇臘而執聽潮而圓見信而寂

魯智深偈と投り〜く数遍誦〜孔长老と孔ホ紬ハ长老の云法須
くホ法を説取して幸朱の面目と忘ぶ〜ことと又宋江と宋侯あり

病已に三度の前後に知りしかども長老列席に成と待て散せけり。翌日寅
辺魯智深あゝびに然大れる名長老に成りまゝ山とやりけれども智深長
老自ら法堂を引く山門の辺まで送りて寺に帰れ長老に附ゝ
めて廬山を離れ去に成ぬ。廬俊義と慕く高ぎこそ年新に成りけまべ。
廬俊義は孫勝自ら出く寺に帰れ山のことを
使て彼法堂を廬俊義に孫勝に成と嘆きべ疑
ひを起ゝれば蕭嘉穂と云人く。徐懐の法堂いんを容易に嘆ける
とはんや。冥ゝくを疑を結ゝ知る人とも亦時威欲上ざりけり

○双林院に慈恵故に過

かくて双林院に到りし時。廬俊義を初と云て各従我の者と体ま
ゝめ一夜を過せ折節各の節に過れば寺に自化各寺

半あるを知ゝ一湯朱俊の佳節に成ると欲び。双林城中に於ゝ
大に吉平宴を催けゝめ。一百八人に三軍一同酒を酌ゝめ。吉平と
賀せ申る。七日上下皆大に酔れば寺に再び寄を炷。亦人に対し
くいとゝ。亦片手あり見牙独竹ゝ呂今各朝廷の法あれば昔の
比ふあゝびや皆天星地煞の精なれば各矢人あゝ悪魔れ佐け。各義
と云ゝ。乗い必ず乗と用うし。為に友と憂へ生る時と用う見べと云
死ゝに用日用剣に死ん。ゝ亦に従て為義と忘れ始を統あき者い。
とりふ神明の冥罰と蒙り。彼ゝく地獄に陥ゝ。万世人と生ることなけんと。
誓ひ終まべ。亦人用ふ発死ゝ。只生ゝれ生ゝれ世ゝれ云せんと盟の血
を歃り酒と飲ぐ。大に酔。各帳中に入ゝ休ゝけりぬ。夜法に墨書い帳
中に立ゝく夏に似ゝく夏あゝびゝ。多ち一个の処に到る。山来て水明ゝに

してそのご風系好地あれば傳の人ふそ地と問ふ列ち双林渚と言へけ
きば。蕭丈人中よ云へ〳〵。我此地城内ふ生〳〵。此ふの系地あるとも〳〵ば
く旋行〳〵て廚人も妨めじと。呂ふ組せ二三里行るふ。忽ち渚へ出るの
嘶く聲を蕭丈人とうて見ると。一人の大漢ふ沢ふ素紗巾を裁
き分よ皂布の乃袍を着〳〵るよて出来る。見角巾の人とこへざれば。
蕭丈人停く熟〳〵身つふ〳〵し面識あるやうあれば。探沢探脳えすま
を時。彼人近く来く呼て云。呂大牛い蕭丈ふあ〳〵どやと蕭丈云。扨て
見伴黄忠見あるとて此時黄忠ふ呼て苦ふ礼とな〳〵。久濶の情を
叙る処へ軍士ば大軍ふ知り。蕭丈列家ふ
と指ざ〳〵黄忠ふ對〳〵て云。呂列家ふ行こと此時家ふい蕭丈が一个の
人と伝話をとうて。彼人の弁と何つふ相貌堂〳〵る人柏四ふるふ

下りて礼とな〳〵。彼と座問〳〵云。る士の大名いうん。彼人慌〳〵礼を
遜〳〵て。系姓ハ伴。名ハ黄忠。世〳〵大名府の住人。今山梁ふ陥ると栖
う為〳〵ふの大名耳ふ雷の裏ごとし。又蕭丈軍と系い縁て陥ると交
なしば。一別以来ふ人〳〵ごろと数年間ふ吹。蕭丈ふの麾下ふ為りと。
見と以〳〵系又収ふ場ば。今生涯ふ遠を別て西ろ〳〵てとこ。
系特〳〵此ふ来〳〵蕭丈軍と待しふ。ごろ〳〵ば家ふ過ことを以ろ。系
の者ふ〳〵。今系皆〳〵蕭丈軍と敬屋ふ迎へ暗く久情と言んとを
欲ば。人〳〵と伴〳〵の人蕭丈も又告て云。系伴君と四〳〵別
生料ば此処ふ過。已ふ伴君の英名と聞れば。系一とび彼石ふ拝〳〵んと
と新〳〵生涯と伴〳〵の人と云ふ。家ふ猛虎思ひ出〳〵列黄忠ふ
対〳〵て云。蕭丈軍ふ人生の英名と伝り。周〳〵慕ひしる。今日料ば

うんかうと見天の漆合を同じく城中ふ回りて一盃と酌んいうん。費忠
辭しそ云。宋先生の方義あることを賞て久しく。よろこぶの左右ふ侍せん
ことを欲す。老母ろ〻〻七旬ふるれば。遠く離うう〻。家はこれからど
系統〻〻勤じとて。燕青ふ對し賢弟今任ばいあく俗〻我ふ無き
せ〻なるとあれ系ふ向〻べ朔又すべし汝もそれとるべうだと。令
すれば燕青それ〻し紙屋後義ふ向ひ郭と問〻〻家は
扇沢紙ふ辭別せ〻べ第は紙大軍を紙〻〻を発ば。時遇きは一人
の軍卒ふ紙囊を擔しめ又別ふ一足のるを徒へ。ふ系戦〻〻獲る
ふ絆費忠と系双林寺と生村とを梅を経山下の小道七八里もを過ぬ
人る上ふ背の伏活ぎ〻。又二十餘里ばを大溪の辺ふ到りれば。費
忠命人のる山と指ざ〻て。山中系が敬屋あるとて。ばを十餘里遂

山中ふ入るふ山密房溪澗澄り。燕青天を見て天色ふ春
ぬ。日常輝生。染霧沢扉映ふ教紅光ようり山大伯山と。昔神
禹河とをすてをり。知と紙書経中ね大伯ふ至ると。紙ちふ知知のる
なり。絆費忠燕青と言の〻山岐と。せろ山上ふ到るふ平らある地ろく
樹木深き処。二口軒の系金あり。門ふ
俯仰蔡松藏〻して。第門半ふ掩ふ。費忠指ぎ〻紙系ふ宅
〻と言ふ。牛羅の間ふ一人の村童。蓑農の中ふ松枝を拾生
ろ。勿ちる陣の言ふ怪〻。此山中ふ何ものるる陣の言あるやと。
ふ出〻〻ふ法へのるふ上ふ人あれば。紙〻〻〻系ふ出迎。費忠燕青
二人るより。堂ふ入賓主坐定り。紙ふ系と進め。費忠燕青ふ拜
ふ紙とふへ耳房の中ふ休〻めるとて後槽ふ繋〻〻む。時燕青

貫忠の老母ふまゝえ刑貫忠と後房ふ却り。窓と開きて遠近を眺む
れば。水紅山光一望ふ映じて。そゝ系画てともおもうべきれば。感吉称すること
再こ貫忠ふ勧めくいつゝく。酒居何を称すふ是んやと刑遠と征せ
ゝと問へこと。ゝ時を移ゝ玉ゝ。書子ふ乗り脆ととり〳〵卓子とか
き出ゝく。一盤の鶏一盤の魚と並べ。且一壺の酒と持出まべ。絳貫忠把
く盞ふ注ぎて。村謡唱菓わふ歌とれ侍ふ是〳〵んや。感吉云ふ
ど和擾和〳〵。此時窓外の月光白昼のごく。雲収ゝ風静ゝ。風
系ゝふ使ゝりれば。人数盃の酒と飲けゝ。已ふ闌ふ及び〳〵ふ。感
吉云昔系大名府ふ在〳〵時。呼ゝ〳〵と莫逆の交とあせ〳〵ゝ。彼ゝ
忠ふ武挙ふ為〳〵て。仕度せ〳〵ゝと呼〳〵ふ。高流曾退くゝ。此処ふ
居〳〵ゝ人。何等の風流ゝ。系のごとれ系あふ事を為して。ゝ

一日の帳を垂れ。貫忠考〳〵云。宋公明及び呉勇の英雄〳〵ゝ
天下ふ隠れなし〳〵。系のごとれば只荒山ふ居ゝ。文ふ天子の功ゝ。たゞ
恨〳〵ふ奸臣高俅を怨ゝて朝廷と義如ふ是れば我も如〳〵ゝ生るふん
なゝとて。人又盃を洗〳〵ふ。文ふ敬ひ時感吉い白居世ゝ為と知出
く。貫忠ふ送〳〵云。落れ郷〳〵ゝ紛めゝ人と。貫忠固辞て文ゝ。感吉
又勧て云。忠此のごく〳〵の才徳を。第ふと同〳〵ゝ打〳〵ゝ。ふと同
〳〵。系ふ応て出身と求んいい。貫忠は是を数〳〵云。正ふ今奸臣
権を弄ふし。賢良と知ゝ。才徳と忘れて出居及び世世の人非あく
〳〵て。むゝふ害せ〳〵ゝ。ゝ。これふ後〳〵系ゝ。死灰とゝ。ふ
忠も又功成名遂るの後ハ必ず早く退ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
為ると。感吉云ふ欲〳〵止ゝ。又仕ゝ〳〵て。夜ふ入ゝ。ゝ休むひの

胡とてふ胡級手て賈太刑燕青を使ひ山前山後ふ到て遊賞し燕
青高紀知ふ登く。四方を望むふ見面い所く望りくる峯ありて流れ
源深くて人の往来あく。孫しさ者の峯のそうして。そ辺ふ住る人
部ち兵二十餘名のこと。燕青大ふ悦び此処桃源ふ移まりとて。弟と
金ぐりとて。そ日もこふ暮れば夜も又一宿し。次の朝別ら賈忠ふ
暇別せ〜ふ。賈太ちがと止め別童子ふ命じて一抽の掛物と紅
出〜。燕青ふ渡〜云。こい迎ごろ系ぐ画く処ん君系ふ返〜べ要く
と褒賞せられん。後〜必ず再ち和ふべしと燕青謝〜て軍車ふ金
行囊ふ収め表人れらるくよ悪びず。賈太刑燕青を送ること二三里燕
青ご云後ふも君と送るる千里ありも遂ふ一別もとしとの人。遠く送りた
りんとあれと。そ時表人為〜として別を。互ふ送て已ふ後を備れ

び燕青へるよて表ぎ日と程く東京ふ到ふ。部ち明ら軍馬東
京城ふ陣構取ふ屯し。聖旨と待て生ふ出ふ。燕青ふ
来く宋江ふ系ふ兄弟ら向ふ右射鞆樞密中宋の人るい已ふ城中ふ
入宋江ふ軍功と要〜〜天子ふ奏聞しべ。天子大ふ称賞〜るひ別ち
其つ位帰と之る安人ふ命じ宋江ふ正と甲冑と与あ〜朝見せ〜ひ〜そ
甲冑の下ふ孫の鎧と纏ひ東京ふ入文徳殿ふ就く。天子ふ朝見此
時百官衣冠束帯と唱止て天子
金帯と云ひ〜〜。天子大ふ悦び宣つ。朕此ひ卿ふ与く征伐ふ勇
あると知きり。兵中傷する者あんと思ま。事ふんと勇ひり宋江表
して云。聖主の法猶ふ憑で。中傷もる者を〜〜。今遂
虜ら〜平ひ〜〜。全く陛下の威徳ひて而已ふ何の勇あんと。皆ふ偏

造主日
許賢忠
観遊して
そ

伏もしば天子の有院なる命じ。宋江および封爵を授くべきを待つあり。
左所蒙京師御器童貫をを出て奏しるべ宋江が封爵の事を
計べしとふ命じ天子酒宴を宋江および
酒を飲ん宋江魔復義の祭祀一切金甲一副名馬一疋を賜ひ
ふく金銀を賜ひしば宋江と拜し奏て名恩を謝して樂叢を退出
し孫招撫の管ふ返つく宋江と彼の聖るのりをとわ待ちて日數を
ふ〜ふ蒙京師童貫ふいんで封爵のことを待んや。文ふ行の消息も
なし。或日宋江管中ふ家居し。其用と古今の得失の話をなしくあり
る処。戴宗石秀。石平生の衣裳して来りて宋帳ふ坐ること
しばあ人ふ〜〜遊行せんとと欲し。ときに出て告る宋江ふ云ふ
く行て疾くいまを今日ふ〜〜行〜と二盞を飲ふべしと。ふ戴宗石

秀二人い清招撫と雖も多くの市坊村坊とるて酒の傳と呼るふ大ひある
碑石ふ造字爲と敬ひり。又右ふ多くの字あれ世宋月と経て磨滅
してこんど戴宗ふ細ふ入ていろ〜。先昔蔡襄字を造る処ことふ秀ふ
云ふ我らの字るとふあ〜べとく。あ人い歌とうん合ぬ。ねあひぬ。ふ〜ふ一二里又
待ふ地ふて地上い居〜〜夜深なり。又例の石碑の面ふ博浪城の三字
と刻り。戴宗ふ〜〜ことを云ふ刻ふ滄海壮士とし。秦の始皇と称
しめ〜有ことを。称賛ふ石秀ふ云ふ惟ふ〜べ。ふ一推中ふて。あ人又嘆じ
くふ武時管を離ふ〜ことふ十余里石秀ふ云我ふ費ふ遊び。ふ日ふ行ど
一盃の酒と用ひざ〜えや。戴宗ふ云ふ人のまふ雖も処ふ酒肆ふ〜べや
とあ人まふ酒店ふ入て。窓の辺ふ坐し。早く酒保酒と持来まと叫べ
い酒保ふ応て又六四の菜蔬と並べ〜〜と拱て向て云ふ人ふ〜〜の酒と

おるやとぶん虎ぐ云ぶんあ角一斛の酒と拉牛肉あ〜べ只管拉牛肉と酒
保ち〜往ち〜酒及び一盤の羊肉を拉牛肉べあ人盃を挙て共よ砂ぐ
車〜ぶべ多ち一人の大漢み居ふ人ち〜。ち〜ふ傘と杖ぐ〜ぶ抑ふ腿綱
獲脇とてき大ふ喘ち叫んで云ぶく酒肉を拉牛肉我大志の云幹あり
く城中ふ行と酒保ぶ〜ぶく酒と肉と拉牛肉べ彼大漢一向ふ欲食べと
えち〜。戴宗別同ち〜云ぶ下西〜〜行の云幹あ〜ち〜ち〜。彼漢
とちふ亜ぶ迎と拉ち〜言ていち〜。河ふの大寇田虎孔とあ〜。你ぶと知
や。戴宗ぶ云我孔ふ吹ど来ぶ要〜きとあ〜べ。彼漢ぶ云田虎ぶ孔
とあ〜や。及縣と奪ひ官家もこしと制するゆ絡べ〜ぶ去い蓋只と攻とう
迫分又衛列を攻んとぶ〜ぶ〜ぶく城中の絡動斜あ〜べ。農百姓も安きん
な〜。国ち〜ち府ち〜ち〜を為ふ東京ふ絡〜〜〜れと告〜〜ち〜。

く〜ち〜酒後を拉ひ拉と傘とを拉ぶ門と出嘆〜ていち〜。皇天ち〜
情と宝。救ひの云と奔〜〜我ふ〜ぶ妻子とも〜年〜なしあ〜人とて。
東京の方へ去ち〜れべ。戴宗石秀もぶとを少去ぶ〜ぶ酒代とち〜ひ酒拉
欲ふ入り〜ぶとを宋江ふ告ち〜れべ。宋江別呉用と相議〜て云牧ら
ぶ知ふ宋庄〜日と送んち〜。ち〜ち〜ち〜天ふ奏聞〜兵と起〜て。田
虎と征伐せんいいん呉用ぶ云ぶ〜ぶ年必べ宿古廚ち〜奏〜ち〜ち〜ち〜。盛牧
すべ〜〜と〜ち〜侍又徳孔と集めぶとと〜〜〜〜れべ名大ふ喜べ〜ち〜れど
次の日宋江自〜ち〜孔と云ち〜。十殊人の伴歯を別宿古廚の廚中ふ来と
薬肉ち〜ち〜れべ古廚別宋江と堂上ふ待ぶ時宋江来孔と〜
温と盃ぶ廚別れと返〜て同〜云孔軍行名ふ光源ち〜宋江ぶ〜。
宋ち〜ち〜人ち〜河ふの田虎孔とち〜。ち〜の加勢と攻孔近日又衛兵と攻と

来かうんるゝ今年ふ年なれば弧ろ征伐と征伐〜。ゐと出ふ
十八〜。男ち見相けとと奏〜。ゐんや古射大ふ版ぐ〜。ねるまえ
ふ忠義ふ報必ぞ天ふ奏受せんとて。酒宴と設け〜。宋江伐
歓待ふれば。宋江大ふ和樹〜。り参ふ。り。翌中ふ。ゆり。宿ふ射の
清ふと須ひ待ふる。次の日宿ふ射い。被ふ敗ふ於〜天ふまえ。この
時者皆皮奏〜て云。河ふの田虎造反して。只今ふ射ふ年ふ騒と及れ
自〜王と称〜。年号と改めちびひとり。清川懐ふと及れまりて。天ふ
ひ奏と受〜大ふ驚き。列文武の百官ふ問〜宣〜。卿ふ推ふ朕ふ為
ふひ誠と征伐せんやひ時宿ふ射をを出奏〜て云。田虎ふ
の為ふと奪ひを勢ひ彼ふ中のど。猛ふ雄ふあ〜ぐれば。故〜
ぐ〜。只今ふ遠と彼〜。猛ふ為と。宋江ふ撃ふ死せり

彼ふ勅〜〜征伐なく〜ゆのろ。必ぞ大功と成ふんと奏すれば天ふ大ふ
悦びひ。列宋江ふ忠義と被ふ敗ふ為ふ。ふ吾ね〜年れば天ふ勅
て。卿ふ英雄ふて忠義ふと。朕素より知。今卿ふ勅して河ふ
の逆徒田虎と征伐せ〜めんふ必ぞ労と辱せば。ふ〜凱歌と奏せ。
ふ〜優擢べ〜と。ふれば宋江ふ感義奏〜て云。ふ〜己ふ聖恩と
為り何ぞ労と辱するとせんふ死と〜ふ報ぜんのこと。天ふ就
勅大ふ悦びひ。列ち宋江と平ふ和ふ出ふ封〜。感義と同じく
副ふ為ふ封〜。各ふ酒ふ綵紙。今甲冑紀と賜ひ。そ年の法ふ限定
ふ〜と賜ひ。紙と平げ同り宋〜。功と論じ皮位と封べ。勅あれば
宋江感義再拜〜て朝廷と退き営中ふ同りろ

○宋公明の兵黄河と渡ろ

傍も家に法師を集め。勅使の部屋に。鎧る衣甲を整へ。家に
又呉用と計議し。先ず軍を令じ戰船を黄河に出し。我軍
の勢を待て。黄河を渡らんとす。今日は吉日と拔ぐ征を以て柞河の田虎が出方を探る。かねて威嚇列
仙洞の獵所なり。性質力弱人を搖き。武藝を秉ぐ者を恐れ。
り。幸に此地は万山に分て擺り。要害に入れ。武年大に早して
百姓大に困窮のあまり。孔と云人の机に系じ。遂に妖云と称く。
人を殺し。始め人を招き財宝を奪ひ。次第に増出し。
ふ虎を攻れり。多勢ひ強し。皆云も是に敵すること能はず。
家紀の末に。孔の老人いを偏来しの法候の面に出るまで。
濁悪と好んで。唯一人武術を能とする者あり。田虎のどれ亡命の

徒に。あるべく。ひ殺に。あるべく。田虎は四十六縣を奪ひ。
ひ殺に。田虎遂に汾陽に。敗と建文武の百官を役
け。自ら晉王と称し。多くの猛将と。要害の地に立籠りけるぞ。
容易に攻ぶさやうもなし。去程に家に吉日を撰び。軍を出せば。宿を射
自ら。本く。殘し。趙樞密も。営中に来く。三軍と。共に。時宜に
慶徒義に。宿を射趙樞密に。
八孫孫。とん。とる。し。む。虎の。と云。大刀関勝。敵に。林冲。
憲大泰明。双鞭。呼延灼。双槍。董平。八孫孫と云。小李廣花榮。
令箭。徐寧。面獅。楊志。矢。没羽箭。張清。関舞。
朱仝。九紋龍史進。没遮欄穆弘。生。の。法。発。孔。又十六
の。敵。と。後。なし。む。人。三山黄信。病尉遲孫立。醜

弼馬宣贊　井木犴郝思文　百勝將韓滔　天目將彭玘　聖水將單廷
珪　神火將魏定國　鎮海將董平　鎮海將張清　小霸王周通　摩雲
金翅歐鵬　白花蛇楊春　小旋風柴進　病尉遲孫立　美髯公朱仝
鎮三山黃信　青面獸楊志　霹靂火秦明　雙鞭將呼延灼　急先鋒索超
沒羽箭張清　一丈青扈三娘　金槍手徐寧　神機軍師朱武　鎮三山黃信
病尉遲孫立

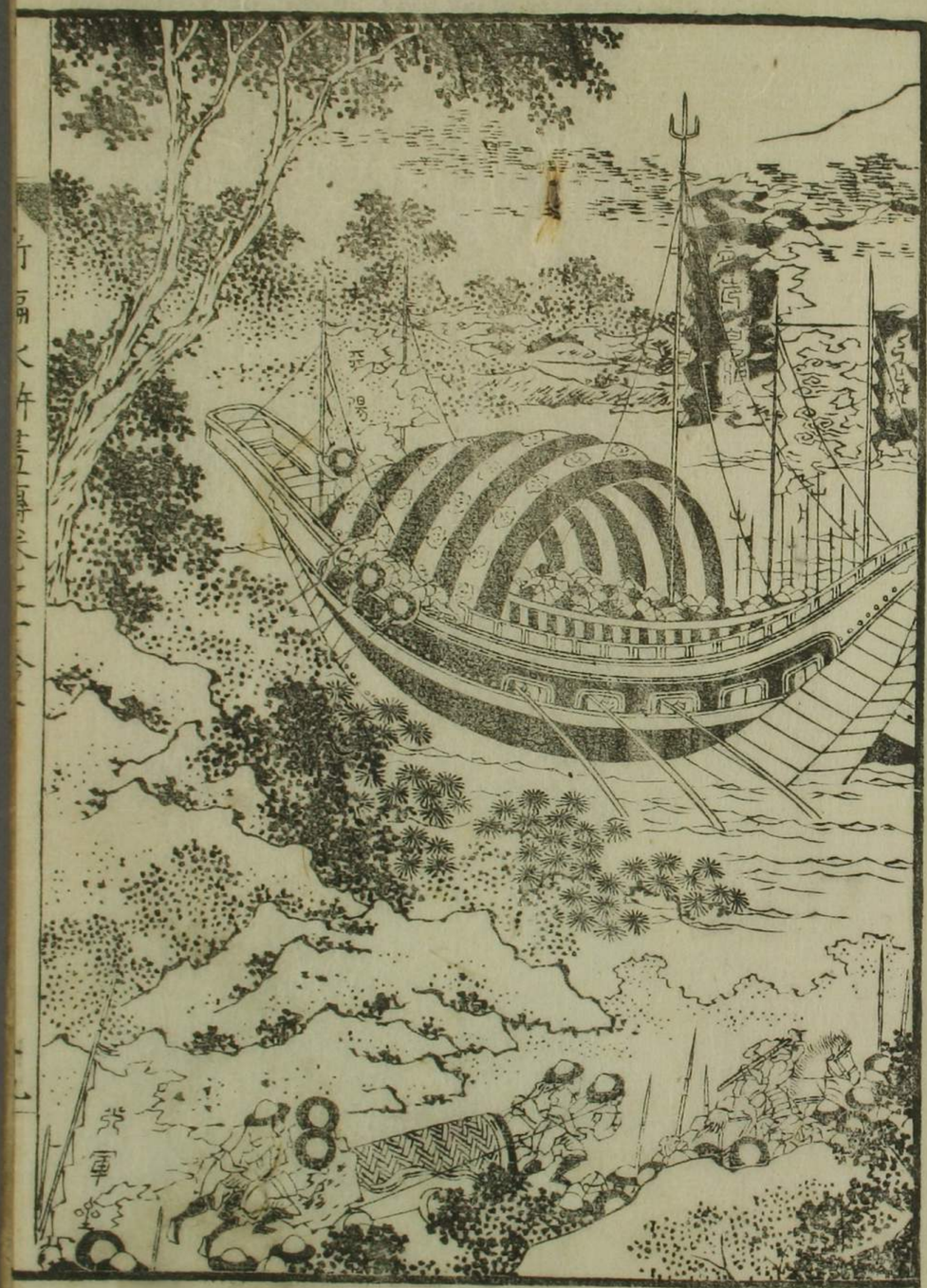
ければ宋江呉用と共に発せんとす呉用が云ふ彼兵久〳〵弱まれば盧俊義
必ず切てなをん我事えよう。三晋の地形を知らざれば一人の案内者を得
て。吾を先〳〵と云も孫〳〵ざるふ。沿ふ藁書を出。軍師必ずんと労
するなり。三晋の地形を知ふ。情中より色物を出し。卓
上ふ展まべ宋江呉用始めて細ふ〳〵ふ三晋の山川を委く画き
あるめい城地或ハ要害処伏勢すべし。此処ふ戦へべしと結りて〳〵字し
てんい呉用孫を伐を伐ふ。ようやく藁書を宋江ふ對〳〵 幾日遠と彼
く同じ時彼双林結を出せり。件要害が彼の処へ宋江が云ふ日迄
り来り時我軍の事ふ知給ふ。彼人ハ果〳〵て英
雄あるん藁書が云ふ要害えより指掌多事ふ〳〵云ふ通ず知器ふ。
ふのふ役ふ琴棋書画ふ知るまでせざる処ふ。彼人仕度を好べたぐ

退を除きく世よ文〳〵と彼が知〳〵処と逐一使まべ呉用大ふ感
嘆ふ天下の英才と学ふと嘆ふ。是を宋江も又深く嗟嘆せり。されば
盧俊義ハ先ず英俊孫立ふ三ふの兵を以て清川城の東五里斗ふ
伏勢せしめ。又史を揚志ふ三ふの兵を添て城の西五里斗ふ伏勢
を設け。そ夜潜ふ二ケ所ふ老し。次の朔盧俊義又ふ飯をたらしめ
軍士〳〵絶まで食せしめ。夜明ふ清川城ふ押寄。兵を多く三隊ふ
と揚〳〵金を鳴し。戰を挑まし
鼓譟〳〵攻を。の鼓譟ハ別細文忠の新下の勇将ふ。丈九尺力強人
ふ強き。是を二十斤の凌風力を使ふ。又偏将慮俊義耿恭二人ハ扶け助
けを

○盧俊義墨俵ふ故を破ハ

此時董沈は宋朔梁山泊の兵と共に城下に推寄せんと欲ぜしが
城を出戰はんと欲せしに耿恭を出だすべき吟味第一に成る
人は遠く勇猛なれば容易に敵すべからざるを見て城を堅く
蓋州に籠り敵の兵を求めあぐみ方より兵を換へ攻めを可あらんとて再三
兵を出められ董沈いかで突入れ紛大に怒りて云耐ぬ我を侮
り遠く来まで必ず敵まんぞ戰はんと片甲をも納さず切
出でさんと耿恭に城を出でしめ兵を引つき
城を出でし時あ軍大に喊を作り鉦とらち和
の内より董沈まんまんと出でし沈濮と共に全の盃を戴き分に鉄甲を
中に潛ませ刀を挑げ出でる郭に罵るを小泊の軍寇に死を送り来る
や宋の陣中より朱仝出でし唱へ云天兵何ぞ敢へて抵抗せざる

我力を汚さんと免んとあれ戰ひ十餘合彼を切ることなく朱仝出でる
入れ来ると董沈勢ひ郭に向ひ進み来れば宋陣より花榮出で
躍せ後を持へ戰ひ三十餘合に及ぶ彼を切り傷負ひ沈濮傷ようん
く董沈を投んとすると花榮後を突花榮敵の陣と入れ馬を飛せ
来の方へ走る董沈沈濮出でる郭嚴と戰ひ過ぎし時耿恭城より入て
紀方に出でんと思ひ全を呼び一命を收んとせし処に宋陣の
より一隊の軍出る孔明孔亮達魯智深と称めるくの方に出でを
早く城門の辺に突来まれ云いかんぞ此勇猛に出でん耿恭を城
つと守んとする時に宋岳城中に切入つの軍士を集り防んと立ての
と魯智深大に吼ると一聲禪杖を舞ひ四人と打倒し雲達
斧を左右に振く六七人切倒し孔旭と引く後に切入て城つと



宋江の大軍黄河を渡る

集ひ来れば耿恭申されけるは、城樓より花ちりぬとて
迎んとせしに、呉王ふ宋云ふ事抜きぬ。されば董沈纘い花菜と戦ひ
左右ぶ。忽ち城内喊の声起ると呼ぶると、入し城内ふ向んとすると、花菜
遣さんぬ。ち為とつぐ、遷と敗てべ。呉王董沈の後んを射くるう忽ち
為ふ。ふ。此時盧俊義云と招く敗くふ切捕まべふ云大ふ敗きし。
沈纘い董平ふ切敗されぬ。ふ付ち去數とまべ。李逵い只管切て
迫まべ。盧俊義制し。獲ふ百姓を害ひめべ。呉ふ陵川城を集起て
宋軍の旗幟と蓮皮和の扶物ふ為城の鉾とまべ。めければ呉行
孫立史を揚志も城中ふ入りける。ち為ふ董平い沈纘が呉を敗
じ。花菜い董沈のそと敗じ。範旭らい耿恭及び多くの軍士を生
捉く陣中ふ引後せべ。盧俊義命じて流人の縛と解しめ自し耿恭

げ。ぶと引く。容保ふ陣ロ引し耿恭ふ捕となり引く
いんぞ呉の石ふとらけん。盧俊義技け起し。将軍城と出く敗せる
い必ぞ浮きぶ。今宋公明一号ふ賢士と扎く。将軍降伏せべ必ぞ
言く耳ふ。耿恭涙と垂くいるく。呉ふ為の息と為まべ。加く
毫ロの一小卒まるく。呉ふ為と報ずべし。盧俊義大ふ喜び。再び好
言と以く。ふ俊系せる軍士とつけ。酒宴と設け歓待ぶ。又三家と
黄蜂し。早く。刑耿恭ふ問くいるく。蓋ふて城中いくぶくの人ぞるう。
耿恭答く曰。城中い刑徒文ふ為と。ち為ふ。勇猛の名ふ為して。又左右
ふ湯城沈水二ケ和の城あり。四ふ為平城のくるを去ること六十里ふ。
地韓王山ふ近し。城中の守将ふ札。趙能む勇猛なりと。安く陥しべ。
盧俊義申く拝と答。耿恭ふ対して云。官軍ふ酒と飲ぶ。今

彼の内招軍をとゝて一ツの功を立てめんを必ず勇を練すとあり。
耿恭が云ふ系已ふ是の為為と家り。何ど労を辞せん盧俊義応ぐ云。
招軍已ふ行とと肯ぜば必ずかくのごく如是ふあすべしと湯ふ斗りを
授け。又雪達ふ命人ふ各〳〵小軍の旗号印〻衣服を為せしめ。又
揚史史をふ又百の人るを為添雪達ふを従へしめ。又花栄
ふとゝく渡川城とちまこ。自〻三子猪とちまこ人接應せんとち撓
已ふ点れば耿恭が伏とちまこる平城の南つふ到りしが日ちふ雪
光の下ようを望こうふ雄壮閃ふ輝うを彼厳なり。耿恭城下ふ
ちまこるを見ふ驚くいそく。我ち渡川の耿恭なり。量況猛我伏めを吹ざ
ろふ伏〻。遂ふ渡川を渡りる系圍を切拔け百姓人を引つれ出処ふ
逃走まとりぬく門を開て我らを救ひりへべし。ち城の軍士は都を張

札を趙祐ふ告時ふ点人撞ふ上て多くの火炬を燃さめ伏人ふ第〻
耿恭ふ点ふるふ系渡ふ従へる軍士らぬ〻く彼方の羅平なりけ。
れば列城つと寄きてをまゝひろふ耿恭が軍平我方已と爭ひ入。
是列雪達紀旭項元李袁列屠石秀楊雄の七猪こ渡べふ陣へる
百姓人もとぐく来軍の前云ふ把門の軍士は〻ふ波ら伏をけて
まゝき列となゝ入るべとぬまゝ云も伏〻ふ雪達ふ名拔列
てあるも把門を切とろ〻数〻ふ城中ふ切入べふ点大ふ勝ちを上を
下へと発動す。法札殺を渡と様へ出るふ石秀出合られば為將戦
ふるを六七合遂ふ石秀ふ切数さる。時多ち一声の砲響を。幹王山辺ふ
一班の軍ふ地為る。点ふ点ふを〻ふ。点ふ列史を揚志こ名散〻ふ
切来まとふ兵付る若数ちべ。趙能も孔兵ふ切数さる。盧俊義も兵

と紙し紙来り。張礼が使者と切磨し。三軍ふ令じ。張ふ百姓と殺
ひとと禁じ。礼と出し軍民と安んじ。会と紙し。宮軍城ふをそう。
使者と以く捷と衆先鋒ふ告しめり。ぞ鋒ふ家江ハ氏時呉用とせふ
軍牢と紙し左右処ふ知ちち屬優義が使者ふ。妻細と家先鋒
ふ告れば衆ふ弄ひ。紙ち呉の用ふ対しそいそく。屬優義一日ふ二城
と破きば。織人も己ふ勢ひとをるべし。そ功大ひなるばやとそ。漢弥
しぞ逆の戦功とかろし。使と同しろう。礼徒の功労ふ巻より
続くそ。

彩編水滸画傳巻之七拾弐手

河原氏蔵
屬優義の功績
徳書八